

【2】 研究の経過と本年度の取り組み

1 平成 7年度（1年次）の取り組み

平成 7年度からの新たなテーマ「生活を楽しむ子をめざして」をもとに、1年次では次のような取り組みで、研究の方向を模索していった。

(1) 取り組みの構想の立案

中学部では「生活する力」、「生活を楽しむ力」とはどういうことか、どんな違いがあるのかを話し合い、共通理解を図った。

(2) 実態把握

生徒と保護者を対象にアンケート調査をし、生徒の家庭生活の様子や両者の意識の実態をつかんだ。また、WISC-R知能検査、S-M社会生活能力検査をしたり、学部の教師の観察により、生徒の発達の実態、興味関心の傾向を多面的にとらえた。

(3) 授業づくり

中心教科を生活単元学習としたが、他の教科や領域も実践の場とした。題材の選定を核にし、研究テーマに向けて切り込んだ。

(4) 題材の選定

昨年度までの単元を新しいテーマにそって見直し、題材を検討した。その結果、キャンプ、校外学習・修学旅行、連合運動会、大山宿泊学習、学習発表会、連合卓球大会、お楽しみ会「ザ・中学部忘年会」、ふれあい広場の題材を選定して、実践に取り組んだ。

2 平成 8年度（2年次）の取り組み

1年次に立案した研究の構想に従い、授業づくりの実践を重ねた。

(1) 実態把握の継続

1年次と同じ検査をし、発達年齢と社会生活年齢を把握した。また、自分づくりの段階を確認し、支援の工夫に生かした。さらに、生活リズム調査をして家庭での過ごし方や行動範囲を把握したり、学校生活で楽しんでいる姿を観察によりまとめたりした。

(2) 授業づくり

生活単元学習では、年間を通した単元の構成や題材の配列の検討を行い、単元間のつながりや発展を確認した。個に応じた題材や内容を意図してねらいを明確にし、新たに開拓、試行した。その結果、校内宿泊学習、野外炊飯、校外学習・修学旅行、大山宿泊学習、学習発表会、お楽しみ会「ガッツだ！行け忘年会」、お客様といっしょに楽しもう「お楽しみ広場」の題材を選定して、実践に取り組んだ。支援の工夫では、発達段階、自分づくりの段階に応じた支援のポイントを共通理解し、学習に生かした。

(3) 一人ひとりの「生活を楽しむ子」の像と個に応じた目標の設定

一人ひとりのめざす「生活を楽しむ」像を設定した。また、目標を生徒自身から引き出した分かりやすい言葉で表現し、自己反省をして、次への意欲につないだ。

(4) 家庭との連携

学習したことが家庭でも積み上げていけるように、生活ノートや学級通信で連携をとった。生徒が主体的に活動しようとする姿勢を、家庭にも知らせ、協力、支援をしてもらうように声かけをした。

3 本年度（3年次）の取り組み

1年次、2年次は生活単元学習を中心に実践を積んできたが、本年度はそれをそのまま継続するか、違った角度から研究テーマに迫っていくかを検討することから始め、次のような取り組みを行った。

(1) 授業づくり

生徒の実態やつけたい力を検討し、研究教科を「音楽科」「体育科」とし、さらに「書く」力をつけたいと考えた。それぞれの教科や活動がもつ特性や学級の特色を生かして、個性ある取り組みを行った。題材の選定や支援の工夫についても話し合いを重ね、授業づくりに取り組んだ。

(2) 教育課程の見直し

生徒の実態や発達段階を考慮して、体育科の「サーキット」を本年度は「リズム」に変えた。「生活を楽しむ」観点から見ると、筋力強化を目的とした「サーキット」を音楽に合わせて楽しみながら体を鍛える「リズム」に変えることで次のような利点がある。

- ・題材を生徒の実態に合わせて柔軟に変えることができる。
- ・失敗をしても成功につながるような支援ができ、生徒が達成感、成就感を得やすい。
- ・合同学習のよさが生かせ、友だちといっしょに教えたり、作り上げたりすることができる。

(3) 実態把握の継続

生徒の実態把握の方法として、WISC-R知能検査、S-M社会生活能力検査をし、発達年齢、社会生活年齢を把握した。また、生徒一人ひとりの自分づくりの段階を確認した。本年度新たに研究教科となった「音楽科」「体育科」、つけたい力としての「書く」という学習の中で、楽しんでいる姿や楽しめていることを担任が観察し、共通理解した。

(4) 学習する意味付けの共通理解

「音楽科」「体育科」「書く」について、なぜ学習するのか、学習することでどんな力がつくのか、その力がつけば将来どうなのかということ話し合い、研究に取り組む基本的な考えとした。

(5) クラス事例、個人事例の追求

クラス事例の対象学級や個人事例の対象生徒を決め、学級の実態や個に応じた支援の工夫や変容について追求していった。対象学級は、個々の生徒にアプローチしていきながら、研究教科である音楽によって学級づくりをしていった。個人事例の対象生徒は、自制心の芽生え、自己客観視の芽生えの段階の生徒を1名ずつ選び、自分づくりの段階に応じた支援の工夫も検討した。

(高木雅子)